

「季刊遠近」70号、浅利勝照「温泉宿」は四十代の独身女性が、東京から田舎に戻り、実家の温泉宿を営むが、温泉街自体が寂れて彼女も廃業の道を歩む。越し方の生を振り返り、生きる力を得ようとする。地域の荒廃と心の荒れをうまく描きつつ生の根源をみつめようとする作品。難波田節子「背骨を削る」は私小説で、病氣と同人誌の後継問題のふたつのイメージを重ねる。自分のなかの思いを巧みに表現している。

「全作家」文芸時評

終戦前後の懐かしい“思い込み”（「季刊遠近」「人間像」）

短歌評で言葉アートに通底する課題を提示（「塔」「コールサック」）

越田秀男

優曇華の花は三千年に一度咲く。竹取物語では、かぐや姫が言い寄る男達をバツタバツタと振り倒す武器の一つに。一度見たい、が短絡して実際の花のあだ名に、その中の一つがフサナリイチジク。この房ナリから連想したのか、クサカゲロウの卵塊にも。それが由緒あるガラス製の美しい電灯のカサに生えて……

『うどんげの花』（花島眞樹子／季刊遠近71号）——昭和一八年、都内から奥秩父に疎開した主人公（小四女）の家族。引越しの前日、友達のA子が饞別に少女雑誌を。お返し……と思いついたのが、祖母が曾て宰相で暗殺されたお方から戴いた電灯のカサ、不吉な花が生えたあの……。A子は教会の牧師の子、成績優秀・美少女、だから嫉妬の塊。疎開の地で、教会が放火されA子の焼死が伝えられる。十余年の後、A子の日記に邂逅、彼女のあたたかい心根を知る。“思い込み”は蟠りとして心に残ったが、懐かしさも醸す。次の作品も……。

図書新聞